

坂口安吾

石の思い





石  
の  
思  
い



私の父は私の十八の年（ちょうど東京の大地震だいじしんの秋であつたが）に死んだのだから父と子との交渉こうしやうが相当あつてもよいはずなのだが、何も無い。私は十三人もある兄弟（もつとも妾めかけの子もある）の末男で下に妹が一人あるだけ父とは全く年齢ねんれいが違ちがう。だから私の友人達が子供と二十五か三十しか違ちがわないので子供達と友達みたいみに話わをして見ると変な気がするので、私と父にはそういう記憶きおくが全くない。

私の父は二三流ぐらいの政治家で、つまり田舎政治家いなかとでも称する人種で、十ぺんぐらい代議士に当選して地方の支部長というようなもの、中央ではあまり名前の知られていない人物であった。しかし、こういう人物は極度に多忙たぼうなのであろう。家にいるなどということとはめつたにない。ところが私の親父おやじは半面森春しゆんとう涛門下の漢詩人で晩年には「北越詩話ほくえつ」という本を三十年もかかって書いており、家にいるときは書斎しよさいにこもったきり顔をだすことがなく、私が父を見るのは墨すみをすらすられる時だけであった。女中が旦那様だんなさまがお呼びですと行って私を呼び

にくる、用件は分っているのだ、墨をするのにきまってる。父はニコリともしない、こぼしたりするといらいらおこ苛々怒るだけである。私はただ癩しやくにさわっていただけだ。女中がたくさんいるのに、なんのために私が墨をすらなければならぬのか。その父とは私に墨をすらせる以外に何の交渉関係もない他人であり、その外ほかの場所では年中顔を見るといふこともなかった。

だから私は父の愛などは何も知らないのだ。父のない子供はむしろ父の愛について考えるであろうが、私には父があり、その父と一ヶ月に一度ぐらい呼ばれて墨をす

る関係にあり、仏頂面を見て苛々何か言われて腹を立てて引上げてくるだけで、父の愛などと云えば私にはおよそ滑稽な、無関係なことだった。幸い私の小学校時代には今の少年少女の読物のような家庭的な童話文学が存在せず、私の読んだ本と云えば立川文庫などという忍術使いや豪傑の本ばかりだから、そういう方面から父親の愛などを考えさせられる何物もなかった。父親などは自分とは関係のない存在だと私は切り離してしまっていた。そして墨をすらすられるたびに、うるさい奴だと思った。威張りくさった奴だと思った。そしてともかく父だから



それだけは仕方がなかろうと考えていただけである。

子供が十三人もいるのだから相当うんざりするだろうが、しかし、父の子供に対する冷淡れいたんさは気質的なもので、数の上の関係ではなかったようだ。子供などはどうにでも勝手に育って勝手になれと考えていたのだらうと思ふ。

ただ田舎では「家」というものにこだわるので、「家」の後継者こうけいしやである長男にだけは特別こだわる。父も長兄には特別心を労したらしいが、この長兄は私とは年齢も違ひ上京中で家にはおらなかつたから、その父と子の関係

もよく知らない。ただ父の遺稿いしこうに、わが子（長男）を見て先考を思い不孝をわびるといふような老後の詩があり、親父にそんな気持があつたかね、これは詩の常套じょうとうの世界にすぎないのだろうと冷やかしたくなるのだが、しかし、父の伝記を読むと、長男にだけはひどく心を勞あしていたことが諸家しよかによつて語られている。父の莫逆ばくげきの友だつた市島春城翁おうちゆう、政治上の同輩どうはいだつた町田忠治ちやうぢやうぢというような人の話に、長男のことを常にくれぐれも頼たのんでおり、また、長男のことを非常によく話題にして、長男にすすめられて西洋の絵を見るようになったとか、登山

に趣味しゆみを持つようになったとか、そんなことまで得々と喋しゃべっているのであった。これは私にとっては今もって無関係の世界であり、父はともかく「家」として兄について考えておったが、私にとっては、父と子の関係はなかった。私にとっては、父のない子供より父あが在るだけ父について無であり、ただ墨をすらせる不快な老人を知っていただけであった。

私の家は昔は大金満家であつたようだ。徳川時代は田地の外に銀山だの銅山を持ち阿賀川あがのがわの水がかれてもあそこの金はかれないなどと言われたそうだが、父が使い果

して私の物心ついたときはひどい貧乏びんぼうであった。まったくひどい貧乏であった。借金で生活していたのであろう。もつとも家はひろかった。使用人も多かった。出入りの者も多かったが、それだけ貧乏もひどかったので、母の苦労は大変であったのだらう。だから母はひどいヒステリイであった。その怒りいかが私に集中しておった。

私は元來手のつけられないヒネクレた子供であった。子供らしい可愛かわいさなどの何一つない子供で、マセていて、餓鬼がき大将で、喧嘩けんかばかりしていた。私が生れたとき、私の身体からだのどこかが胎内たいないにひっかかって出てこず母は死ぬ

ところであつたそうで、子供の多さにうんざりしている母は生れる時から私に苦しめられて冷めたい距離をもつたようだ。おまけに育つにつれて手のつけられないヒネクレた子供で、世間の子供に例がないので、うんざりしたのは無理がない。

私は小学校へ上らぬうちから新聞を読んでいた。その読み方が子供みたいに字を読むのが楽しくて読んでいるのではないので、書いてあることが面白いから熟読しており、特に講談（そのころは小説の外に必ず講談が載<sup>の</sup>っていた。私は小説は読まなかつた。面白くなかつたのだ）

を読み、すもう角力の記事を読む。この角力の記事には当時は必ず四十八手の絵がはいつており、この絵がひどくみりよく魅力であつたのを忘れない。私は小学校時代は一番になつたことは一度もない。一番は必ず山田というお寺の子供で二番が私かまたは横山（後にペンネームを池田ひさお寿夫という左翼さよくの評論家か何かになつた人である）という人で、私はたいがい横山にも負けて三番であつたように記憶する。私は予習も復習も宿題もしたためしがなく、学校から帰ると入口へカバンを投げ入れて夜まで遊びに行く。餓鬼大将で、勉強しないと叱られる子供を無理に呼びだ

し、この呼びだしに応じないと私に殴なぐられたりするから  
子供は母親よりも私を怖おそれて窓からぬけだしてきたりし  
て、私は鼻つまみであつた。外の町内の子供と喧嘩をす  
る。すると喧嘩のやり方が私のやることは卑怯ひきよう至極でと  
ても子供の習慣にない戦法を用いるから、いつも憎にくまれ、  
着ている着物は一日で破れ、いつも乞食こじきの子供のような  
破れた着物をきていた。そして、夜になって家へ帰ると、  
母は門をしめ、戸にカンヌキをかけて私を入れてくれな  
い。私と母との関係は憎み合うことであつた。

私の母を苦しめたのは貧乏と私だけではないので、そ

のころは母に持病があつて膀胱結石ぼうこうせきというもので時々夜となく昼となく呻うなり通している。そのうえ、私の母は後妻で、死んだ先妻の子供に母といくつも年の違わぬ三人の娘むすめがあり（だから私の姉に当るこの三人の人達の子供、つまり私には姪めいとか甥おいに当る人達が実は私よりも年上なのである）この三人のうち上の二人が共謀きようぼうして母を毒殺しようとしモルヒネを持って遊びにくる、私の母が半気違いになるのは無理がないので、これがみんな私に当ることになる。私は今では理由が分るから当然だと思ふけれども、当時は分らないので、極度に母を憎んで



いた。母の愛す外の兄妹を憎み、なぜ私のみ憎まれるのか、私はたしか八ツぐらいのとき、その怒りに逆上して、でばぼうちちよう出刃庖丁をふりあげて兄（三つ違い）を追い廻まわしたことがあった。私は三つ年上の兄などは眼中に入れていなかった。腕力わんりよくでも読書力でも私の方が上である自信をもち、兄のような敬意など払はらったことがなかった。それほど可愛らしさというものがない、ただ憎たらしい傲慢ごうまんなヒネクレ者であった。いくらか環境かんきようのせいもあっても、大部分は生れつきであったと思う。そのくせ卑怯ひきようみれん未練で、人の知らない悪事は口をぬぐい、告げ口密告はする、し

かも自分がそれよりもなお悪いことをやりながら、平然  
 と人を陥入おとしれて、自分だけ良い子になり、しかも大たい概がい成  
 功した。なぜなら、子供のしわざと思えぬほど首尾しゅび一貫いつかん  
 し、バレたときの用心がちやんと仕掛しかけてあり、大概の  
 人は私を信用するのであった。私は大おと概なの大人よりも  
 狡猾こうかつであつたのである。

八ツぐらいの時であつたが、母は私に手を焼き、お前  
 は私の子供ではない、貰もらい子だと言つた。そのときの私  
 の嬉うれしかつたこと。この鬼婆おにばアの子供ではなかつた、と  
 いう発見は私の胸をふくらませ、私は一人のとき、そし

て寢床へはいつたとき、どこかにいる本当の母を考えていつも幸福であった。私を可愛がってくれた女中頭の婆ばあやがあり、私が本当の母のことをあまりしつこく訊きくので、いつか母の耳にもはいり、母は非常な怖れを感じたのであった。それは後年、母の口からきいて分った。母と私はやがて二十年をすぎてのち、家族のうちで最も親しい母と子に変わったのだ。私が母の立場に理解を持ちうる年齢に達したとき、母は私の気質を理解した。私ほど母を愛していた子供はなかったのである。母のためには命をすてるほど母を愛していた。その私の気質を昔から

知っていたのは先妻の三番目の娘に当る人で、上の二人は母を殺そうとしたが、この三番目は母に憎まれながら母に甘えよりかかっていた。その境遇きょうぐうから私の気質がよく分り、私が子供のとき、暴風の日私が海へ行つて荒れ海の中で蛤はまぐりをとつてきた、それは母が食べたいと言つたからで、母は子供の私が荒れ海の中で命がけで蛤をとつてきたことなど気にもとめず、ふりむきもしなかつた。私はその母を睨にらみつけ、肩かたをそびやかして自分の部屋へとじこもつたが、そのときこの姉がそツと部屋へはいつてきて私を抱だきしめて泣きだした。だから私は母の

違うこの姉が誰だれよりも好きだったので、この姉の死に至るまで、私ははるかな思慕しぼを絶やしたことがなかった。この姉と婆やのことは今でも忘れられぬ。私はこの二人にだけ愛されていた。他の誰にも愛されていなかった。



私は私の気質の多くが環境よりも先天的なもので、その一部分が母の血であることに気付いたが、残る部分が父からのものであるのを感じていた。私は父を知らなか

った。そこで私は伝記を読んだ。それは父の中に私を探すためであつた。そして私は多くの不愉快な私の影を見出した。父について長所美点と賞揚せられていることが私にとっては短所弱点であり、それは私に遺恨のごとく痛烈に理解せられるのであつた。

父は誠実であつた。約をまもり、嘘をつかなかつた。父は人のために財を傾け、自分の利得をはからなかつた。父は人に道をゆずり、自分の栄達をあとまわしにした。それはすべて父の行つた事実である。そしてそれは私においてその逆が真実であるごとく、父においても、

その逆が本当の父の心であったと思う。父は悪事のできない男であった。なぜなら、人に賞揚せられたかかったからである。そしてそのために自分を犠牲ぎせいにする人であったと私は思う。私自身から割りだして、そう思ったのである。

私はまず第一に父のスケールの小ささを泣きたいほど切なく胸に焼きつけているのだ。父は表面豪放ごうほうであったが、実はうんざりするほど小さな律義者りちぎものであり、律儀者でありながら、実は小さな悪党であったと思う。

私がなぜほとんど私の無関係なこの老人をスケールの

小ささで胸に焼きつけているかというのと、私は震災のとき、東京におり、父はもう死床ししよくに臥ふしたきり動くことができなかった。私は地震のとき ترامプの一人占うらないをやっていると、ガタガタゆれて壁かべが ترامプを並ならべた上へ落ちた。立上って逃にげだすと戸たが倒れ、唐紙からかみ、障子しょうじが倒れ、それをひよろひよろとさけながら庭へ下りると瓦かわらが落ちてくる、私は父を思いだして寢室しんしつへはいると、床とこの間の鴨居かもいが落ちており、そこで父の枕元まくらもとの長押ながしを両手で支えていたことを覚えている。

その翌日であったと思う。私は父に命ぜられて火事



見舞みまいに行った。加藤高明と若槻礼次郎わかつきれいじろうを訪れたのである。若槻礼次郎ていでは名刺めいしを置いてきただけだったが、加藤高明のところでは招ぜられて加藤高明に会い、一中学生の私に丁重ていちょう極まる言葉で色々父の容態を質問された。私はもう会話も覚えておらぬ。すべてを忘れているが、私はこの大きな男、まったく、入道のような大坊主おおぼうずで、顔の長くて円くて大きいこと、海坊主のような男であったが、ひどく大袈裟おおげさな物々しい男のくせに、私と何の距てもない心の幼さが分るようであった。私の父は頑固がんこで物々しく気むずかしく、そのへんの外貌がいぼうは似たところも

あつたが、私の父の方がもつと子供っぽいところがあつた。しかし私の父の本当の心は私と通じる幼さは微塵みじんもなかつた。父は大人であつた。夢がなかつた。加藤高明には、妙みょうな幼さが私の心にやにわに通じてきた。私はすぐホツとした気持になっていた。そして私の父のスケールの小ささを痛切に感じたのである。私はそのとき十八であつた。

父は客間に「七不堪」という額をかけて愛していたが、誰だか中国人の書いたもので、七の字が七と読めずに長の字に見え、誰でも「長く堪たえず」と読む。客がそう読

んで長居をてれるからおかしいので父は面白がっていたが、今では私がたった一つ父の遺物にこれだけ所蔵して客間にかけている。また父はその蔵書印に「子孫酒に換うるも亦可」というのを彫らせて愛しており、このへんは父の銜気ではなく多分本心であつたと思うが、私もまた、多分に通じる気持があり、私にとってもそれらがやはり銜気ではないのだが、決して深いものではなく、見様によっては大いに空虚な文人趣味の何か氣質的な流れなので、私はいつも淋しくなり、侘しくなり、そして、なさけなくなるのである。

私の父は代議士の外に新聞社長と株式取引所の理事長をやり、私慾しよくをはかれはいくらでも儲けもうられる立場にいたが全く私慾をはからなかった。また、政務次官だかに推されたとき後輩こうはいを推挙して自分はならなかった。万事やり方がそうで、その心情は純粹じゆんすいではなかったと思う。本当の素直さがなかったのだと私は思う。その子供のそしてそういう気質をうけている私であるゆえ分るのだ。私の父は酒間に豪快で、酔態すいたいりんり淋漓、しかし人前で女に狎なれなかったそうであるから私より大いに立派で、私はその点だらしがなくて全く面目ないのだが、私はしかし酒

間に豪放磊落らいらくだったという父を妙に好まない。

私は父の伝記の中で、父の言葉に一つ感心したところがあつて、それは取引所の理事長の父がその立場から人に言いきかせたという言葉で、モメゴトの和解に立つた徹夜てつやしてでも一気に和解させ、和解させたらその場で調印させよ、さもないと、一夜のうちに両方の考えがぐらつきまた元へ逆戻りぎやくもどするものだ、といひきかせていたそうだ。私は尾崎士郎と竹村書房のモメゴトの時、私  
が間に立って和解させたが、その場で調印を怠おこたったために翌日尾崎士郎から速達がきて逆戻りをし、親父の言

葉が至言であるのを痛感したことがあった。そして私はまたしても親父の同じ道を跡あとを追っている私を見出して、非常に不愉快な思いがしたものであった。

父の伝記の中で、私の父が十八歳さいで新潟取引所の理事の時、十九歳で新潟新聞の主筆であった尾崎罎堂かくどうが父のことを語っている話があり、私の父は罎堂の知る新潟人のうち酔よっ払はらって女に狎れない唯一の人間だったそうだが、それにつけたして「しかし裏面のことはどうだか知らない」と罎堂は特につけたしているのである。罎堂という人は何事につけても特にこういう注釈づきの見方を

つけたさずにいられぬ人で、その点、政治家よりも文学者により近い人だ。見方が万事人間的、人性的なので、それを特につけたして言い加えずにいられぬという気質がある。私の親父にはそれがない。ところが私にはそれが旺盛おうせいで、その点では罽堂の厭味いやみを徹底的てつていてきにもっている。自分ながらウンザリするほど罽堂的な臭気しゅうきを持ちすぎている。そして私は罽堂によって「しかし裏面のことは知らない」とつけたされていいる父が、まるで私自身の不愉快な気質によって特に冒瀆ぼうとくされているようで、私は父について考えるたびに罽堂の言葉を私に当てはめて思い描えが

いて厭いやな気持になるのであった。だから私は、私自身の体臭を嫌きらうごとくに罇堂を嫌う気持をもっている。私の父は罇堂の辛辣しんらつさも甘さも持たなかった。罇堂が二流の人物なら、私の父は三流以下のボンクラであった。

私は父の気質のうちで最も怖れているのは、父の私に示した徹底的な冷めたさであった。母と私は憎しみによってつながっていたが、私と父とは全くつながる何物もなかった。それは父が冷めたいからで、そして父が、私を突つき放していたからで、私も突き放されて当然に受けとっており、全くつながるところがなかった。



私は私の驚くべき冷めたさに時々気づく。私はあらゆる物を突き放している時がある。その裏側に何があるかということ、そういう時に、実は私はただ専一に世間を怖れているのである。私が個々の物、個々の人を突き放す時に、私は世間全体を意識しており、私は私自身をすら突き放して世間の思惑おもわくに身売みうりしようとする。私は父がそうであったと思う。父は私利、栄達をはからなかったとき、自分を突き放して、実は世間の思惑に身売りしていたように思う。私の親父は田舎政治家の親分であり、そしていい気になっていた。



私の冷めたさの中には、父の冷めたさの外に母からの冷めたさがあった。私の母方は吉田という大地主で、この一族は私にもつながるユダヤ的な驚鼻わしばなをもち、母の兄は眼が青かった。母の兄はまったくユダヤの顔で、日本民族の何物にも似ていなかった。この驚鼻の目の青い老人は十歳ぐらいの私をギラギラした目でなめるように擦すり寄ってきて、お前はな、とんでもなく偉えらくなるかも知

れないがな、とんでももなく悪党になるかも知れんぞ、とんでももない悪党に、な、と言った。私はその薄気味悪さを呪文じゆもんのように覚えてる。

私の母は継娘ままむすめに殺されようとし、また、持病で時々死の恐怖きようふをのぞき、私の子供の頃は死と争ってヒステリックとなり全く死を怖れている女であつたが、私と和解した後はおよそ死を平然と待ちかまえている太々ふてぶてしい老婆ろうばであつた。私には死を突き放した太々しさは微塵みじんもなく、およそ死を怖れる小心だけが全部の私の思いなのだが、私はしかし、母から私へつながっている異常な冷めたさ

を知っている。

私の母はおよそ首尾一貫しない女で、非常にケチなくせに非常に豪放で、一銭を惜おしむくせに人にポンポン物をやり、一枚の瀬戸物せとものを惜しむ反面、全部の瀬戸物をみんな捨てて突然新調したりする、移り気とも違い、気分屋とも違う、惜しむ時と捨てる時と心につながりがないので、惜しむ時はケチで、捨てる時は豪快で、その両方を関係させずに平然としていられる女であった。人に気前よく物を呉くれてやる時にも別に相手の人に愛情はないので、それはそれだけで切り離されており、二度目を当あて

にしてももう連絡れんらくはないので、今度はひどくケチな反面を見せられてウンザリさせられたりするのである。人のことなど考えてやしないのだ。何でも当然と思っ受ける。入れる。どうでもいいやと底で思い決しているからで、およそ根柢こんてい的に冷めたい人であった。私の家には書生がたくさんいた。今は社長だの重役だの市長だの將軍だのひとがらになっっているが、みんな親父のかいぶつ人柄はのみこめても、母の人柄は今でも怪物かいぶつのようにわけが分らなく思っっている。本当は微塵も甘さが無い。そのくせうたぐ疑うたぐることも知らない。なんでもそのまま受け入れる。

こういう茫洋ぼうようたる女だからめつたに思いつめて憎んだりしないが、二人の継娘と私のことだけは憎んだので、こういう女に憎まれては、子供の私がほとほと難渋なんじゆうしたのには当然であり、私は小学校のときから、家出をしようか自殺しようか、何度も迷ったことがあった。私が本来ヒネクレた上にもヒネクレたのは当然で、私は小学校の時から一文もんの金も貰もらえず何も買ってももらえないので、盗ぬすみを覚えた。中学へ行っても一文の小遣こづかいも貰ええない。私は物を持ちだして売り、何でも通帳で買ってジャンジャン人にやった。欲しくない物まで買った。私が使

うためではなく人にやるためだ。人に物をやるのは人に愛されたいためではなく、母を嘆なげかせるためで、母に対する反抗はんこうからであった。したがって、私の胸の真実は常に  
はりさけるようであった。

私は小学校の時から近眼であったが、中学へはいったときは眼鏡めがねなしでは最前列へでても黒板の字が見えない。私の母は眼鏡を買ってくれなかった。私は眼が見えなくて英語も数学も分らなくなり、その真相が見破はられるのが羞はずかしくて、学校を休むようになった。ようやく眼鏡を買ってもらえたので天にも昇のぼる心持で今度は大い

に勉強しようと思ったのに、私がまた不注意でどうい  
わけだか黒眼鏡を買ってしまったのだ。私は決して黒眼  
鏡を買ったつもりではないので、こればかりは今もって  
分らない。多分眼鏡屋が間違えたのだと思う。私は黒眼  
鏡だとは知らずにかけて学校へ行った。友達がめずらし  
がってひったくり、買ったその日、眼鏡がこわれてしま  
った。

元より私は再び買ってもらえるはずがないのは分りき  
っており、幸い、黒眼鏡であったため友人達は元々私は  
目が悪くないのに伊<sup>だ</sup>達<sup>て</sup>でかけてきたのだらうと考えて、



翌日から眼鏡なしでも買ってもらえないせいだと思われ  
ないのが幸せであつた。私は仕方がないので本格的に学  
校を休んで、毎日毎日海の松林まつばやしでねころんでいた。そ  
して私は落第した。しかし私は学校を休んでいても別に  
落第する必要はなかつたのだ。私はしかし母を嘆かせ苦  
しめ反抗せずにいられないので、わざわざ答案に白紙を  
だしたのである。先生が紙をくばる。くばり終ると私は  
特に蹙音あしおと高く道化した笑いを浮うかべて白紙の答案をだす。み  
んな笑う。私は英雄えいゆうのような気取つた様子でアバヨと外  
へ出て行くが、私の胸は切なさで破れないのが不思議で

あつた。

私が落第したので私の家では私に家庭教師をつけた。

医科大学の秀才で、こんのいわお金野巖という人で、もりおか盛岡の人であ

つた。しかし、私が眼鏡がなくて黒板の字が見えないか

ら学校へ行かないということは金野先生も知らないし、

意地っ張りで見栄坊みえぼうの私はそれを白状することが出来な

いので、相変わらず毎日学校を休み、天気の良い日は海の

松林で、雨の日は学校の横手のパン屋の二階でねころん

でいた。そして学校を追いだされたのである。そして私

は東京の中学へ入学したが、母と別れることができる喜

びで、そして、たぶん東京では眼鏡を買うことができ、勉強することが出来る喜びで、希望にかがやいていた。私はしかし母と別れてのち母を世の誰よりも愛していることを知った。



新潟中学の私は全く無茶で、私は無礼千万な子供であり、姓せいは忘れてしまったがモデルという渾名あだなの絵の先生が主任で、欠席届をだせという。私は偽造ぎぞうしてきて、ハ

イヨと行って先生に投げて渡した。先生は気の弱い人だから恨めしうらそうに怒りをこめて睨にらんだだけだが、私は今でも済まないことだと思っている。先生にバケツを投げつけて窓から逃にげだしたり、毎日学校を休んでいるくせに、放課後になると柔道じゅうどうだけ稽古けいこに行く。先生に見つかって逃げだす。そして、北村というチョーチン屋の子供だの大谷という女郎屋の子供と六花会むくわかいというのを作つくり、学校を休んでパン屋の二階でカルタの稽古けいこをしていた。カルタというのは小倉百人一首おぐらひゃくにんいっしゅのことで、正月やるあの遊びで、これを一年半も毎日毎日学校を休んで夢中むちゅうちゅう

で練習していたのだから全く話にならない。大谷という  
女郎屋の倅せがれは二年生のくせに薬瓶くすりびんへ酒をつめて学校で  
飲んでいる男で、試験のとき英語の先生のところへ忍しのん  
で行って試験の問題を盗んできたことがあった。私が家  
から刀を盗んできて売って酒をのんだこともあり、一度  
だけだが、料理屋でドンチャン騒さわぎをやらかしたことが  
ある。こういうことは大谷が先生であつたようで、外に  
渡辺わたなべという達人もいた。これが中学二年生の行状で、荒  
れ果てていたが、私の魂たましいは今と変らぬ切ないものであ  
つた。この切なさは全く今と変らない。おそらく終生変

らず、また、育つこともないもので、怖れ、恋こうる切なさ、逃げ、高まりたい切なさ、十五の私も、四十の私も変りはないのだ。

もつとも私は六ツの年にもう幼稚園ようちえんをサボって遊んでいて道が分らなくなり道を当てどなくさまよっていたことがあった。六ツの年の悲しみもやはり同じであったと思う。こういう悲しみや切なさは生れた時から死ぬ時まで発育することのない不変のもので、私のようなヒネクレ者は、この素朴そぼくな切なさを一生の心棒にして生を終るのであるかと思っっている。だから私は今でも子供にはす

ぐ好かれるのはこの切なさで子供とすぐ結びついてしま  
うからで、これは愚かなことおろであり、およそ大人げないおとな  
阿呆あほうなことに相違そういないが、悔くいるわけにも行かないので  
ある。

私の父には、すくなくとも、この悲しみはなかった。  
しかし、この悲しみの有無は生れつきの気質ではなく、  
人は本来この悲しみが有るものなので、この悲しみは素  
朴であり、父はそれを抑おさえるか、抑おさえることによつて失  
うか、後天的に処理したもので、そういう風に処理し得  
たことには性格的なものがあつたかも知れない。

私はだから子供の頃は、大人というものは子供の悲しさを知らないものだときめこんでいた。私はしかし後年市島春城翁と知ったとき、翁はこの悲しみの別して深い人であり、また、会津あいづ八やい一ち先生なども父の知人であるが、この悲しみは老後もつきまとうて離れぬ人のようである。だから父も今の私が見ればこの悲しみを見出すことが出来るかも知れないとも思うのだが、しかし、そうではない、と私は思う。なぜなら、私の長兄は父に最も接触せつしよくしていた子供であり、この長兄にはこの悲しみが微塵もないからである。この悲しみは血液的な遺伝では



なくて、接触することによって外形的に感化され同化される性質の処世的なものであるから、長兄の今日の性格から判断しても、父にはたしかにこの悲しさがなかったんだと思われるのである。

私は父に対して今もって他人を感じており、したがって敵意や反撥はんぱつはもっていない。そして、敵意とは別の意味で、私は子供のと きから、父が嫌いであつたごとく、父のこの悲しみに因縁いんねんのない事務的な大人らしさが嫌いであり、なべてかかる大人らしさが根柢的に嫌いであつた。

私が今日人を一目で判断して好悪を決し、信用不信用を決するには、ただこの悲しみの所在によつて行うので、これは甚はなはだ危険千万な方法で、そのために人を見間違うことは多々あるのだが、どうせ一長一短は人の習いで、完全というものはないのだから、標準などはどこへ置いてもどうせたかが標準にすぎないではないか。私はただ、私のこの標準が父の姿から今日に伝流している反感の一つであることを思い知って、人間の生きている周囲の狭せまさについて考え、そして、人間は、生れてから今日までの小さな周囲を精密に思いだして考え直すことが必要だ

と痛感する。私は今日、政治家、事業家タイプの人、人の子の悲しみの翳かげをもたない人に対しては本能的な反撥を感じ一歩も譲ゆずらぬ気持になるが、悲しみの翳に憑つかれ他人の子に対しては全然不用心に開け放して言いなり放題に垣かきを持つことを知らないのである。

父は幼い心を失っていた。しかしそれは健康な人の心の姿ではないので、父は晩年になって長男と接触して子供の世界を発見しその新鮮しんせんさに驚くようになった。洋画を見たり、登山趣味だの進歩的な社会運動だの、そういうものに好奇こうきの目を輝やかせるようになったのだが、そ

れはもうただ知らない異国の旅行者の目と同じことで、同化し血肉化する本当の素直さは失っている。彼自らの本質的な新鮮さはなかったのである。

私は私の心と何の関係もなかった一人の老人について考え、その老人が、隣家りんかの老翁や叔父おじや学校の先生よりも、もっと私との心のつながりが稀薄きはくで、無であつたことを考え、それを父とよばなければならぬことを考える。墨をすらせる子供以外に私について考えておらず、自分の死後の私などに何の夢も托たくしていなかつた老人について考え、石がその悲願によつて人間の姿になつたと

いう「紅樓夢<sup>こうろうむ</sup>」を、私自身の現身<sup>うつしみ</sup>のようになにふと思うことが時々あった。オレは石のようだな、と、ふと思うことがあるのだ。そして、石が考える。



私は「家」というものが子供の時から怖<sup>おそろ</sup>しかった。それは雪国の旧家というものが特別陰鬱<sup>いんうつ</sup>な建築で、どの部屋も薄暗く、部屋と部屋の区劃<sup>くかく</sup>が不明確で、迷園のごとく陰気でだだっ広く、冷めたさと空虚<sup>くうきよ</sup>と未来への絶望

と呪咀のごときものが漂ただよっているように感じられる。  
 住む人間は代々の家の虫で、その家で冠婚葬祭を完かんこんそうさい了かんりよう  
 し、死んでなお靈氣れいきと化してその家に在るかのようになり  
 式づけられて、その家づきの虫の形に次第に育って行く  
 のであった。

私の生れて育った家は新潟市の仮の住宅であったから  
 田舎の旧家ほどだだっ広い陰鬱さはなかったけれども、  
 それでも昔は坊主ぼうずの学校であつたという建築で、一見寺  
 のような建物で、一抱ふたかかえほどの松の密林の中にかこまれ、  
 庭は常に陽ひの目を見ず、松籟しょうらいのしじまに沈しずみ、鴉からすと梟ふくろう

の巢すの中であつた。

私は母のいる家が嫌い、学校から帰ると夜まで外で遊ぶけれども雨が降れば仕方がないので、そういうときは女中部屋へもぐりこむ。女中部屋は屋根裏で、寺の建築の屋根裏だから、どの部屋よりも広く陰気で、おまけに梁はりの一本が一間けんあまり切られたところがあり、これは坊主の学校るとき生徒の一人が首をくくり、不吉を怖れてその部分だけ梁を切つたという因縁のものだ。もつともその切口きりぐちもまったく煤すすけて同じ色の黒さで、切つた年代の相違などというものもすでに時間の底に遠く失われ

ているのであった。この屋根裏は迷路のように暗闇の奥くらやみ おくへ曲りこんでおり、私は物陰ものかげにかくれるようにひそんで、講談本を読み耽ふけっていたのである。雪国で雪のふりつむ夜というものは一切の音がない。知らない人は吹雪ふぶきの激しさを思うようだが、ピユウピユウと悲鳴のように空の鳴る吹雪よりも、あらゆる音というものが完全に絶え、音の真空状態といふものの底へ落ちた雪のふりつむ夜のむなしさは切ないものだ。ああ、また、深雪だなと思う。そして、そう思う心が、それから何か当のない先の暗さ、はかなさ、むなしさ、そんなものをふと考えずにいられ



なくなる。子供の心でも、そうだった。私は「家」そのものが怖しかった。

私の東京の家は私の数多い姉の娘達、つまり姪達めいが大きくなって東京の学校へはいる時の寄宿舎のようなものであったが、この娘達は言い合したように、この東京の小さな部屋が自分の部屋のように可愛がる気持になるという。田舎の家は自分の部屋があらゆる部屋と大きくつながり、自分だけの部屋、という感じを持つことができななのだ。そしてその大きな全部、家の一つのかたまりに、陰鬱な何か漂う気配があった。それは家の歴史であ

り、家に生れた人間の宿命であり、溜息ためいきであり、いつも何か自由の発散をふさがれているような家の虫の狭い思索しさくと感情の限界がさし示されているような陰鬱な気がする。

別して少年の私は母の憎しみのために、その家を特別怖れ呪のろわねばならなかった。

中学校をどうしても休んで海の松林でひっくりかえつて空を眺ながめて暮くらさねばならなくなつてから、私のふるさとの家は空と、海と、砂と、松林であつた。そして吹ふく風であり、風の音であつた。

私は幼稚園のときから、もうふらふらと道をかえて、知らない街へさまよいこむような悲しさに憑かれていたが、学校を休み、松の下の茱萸ぐみの藪陰やぶかげにねて空を見ている私は、虚むなしく、いつも切なかつた。

私は今日もなお、何よりも海が好きだ。単調な砂浜すなはまが好きだ。海岸にねころんで海と空を見ていると、私は一日ねころんでいても、何か心がみたさされている。それは少年の頃いやおう否応なく心に植えつけられた私の心であり、ふるさとの情であつたから。

私はしかし、それを気付かず<sub>に</sub>いた。そして人間とい

うものは誰だれでも海とか空とか砂漠さばくとか高原とか、そういう涯はてのない虚しさを愛すのだらうと考えていた。私は山あり溪たにありという山水の風景には心の慰なぐさまないたちであつた。あるとき北原武夫がどこか風景のよい温泉はないかと訊くので、新鹿沢温泉しんかざわを教えた。ここは浅間高原あさまにあり、ただ広茫こうぼうたる涯のない草原で、樹木の影もないところだ。私の好きなところであつた。ところが北原はここへ行って帰ってきて、あんな風色の悪いところはな  
いと言う。北原があまり本気にその風景の単調さを憎んでいるので、そのとき私は始めてびっくり気がついて、

私の好む風景に一般性いっぽんせいがないことを疑ぐりだしたのである。彼は箱根の風景などが好きであるが、なるほどその後気付いてみると人間の九分九厘りんは私の好む風景よりも山水の変化の多い風景の方が好きなものだ。そして私は、私がなぜ海や空を眺めていると一日ねころんでいても充みち足りていられるか、少年の頃の思い出、その原因が分ってきた。私の心の悲しさ、切なさは、あの少年の頃から、今も変りがないのであった。

私は「家」に怖れと憎しみを感じ、海と空と風の中にふるさとと愛を感じていた。それはしかし、同時に同じ

物の表と裏でもあり、私は憎み怖れる母に最もふるさとと愛を感じており、海と空と風の中にふるさとをよんでいた。常に切なくよびもとめていた。だから怖れる家の中に、あの陰鬱な一かたまりの漂う気配の中に、私はまた、私のやみがたい宿命の情熱を托しひそめてもいたのであった。私もまた、常に家を逃のがれながら、家の一匹びきの虫であった。

私の家から一町ほど離れたところに吉田という母の実家の別邸べつていがあった。ここに私の従兄いとこに当る男が住んでおり、女中頭の子供が白痴であった。私よりも五ツぐらい

年上であつたと思う。

小学校の四年のとき白痴になつたのであるが、そのときは碁ごが四級ぐらいで、白痴にならなければ、いっばし碁打ごうちの専門家になれたかも知れない。白痴になつてからは年ごとに力が劣おとろえ、従兄なんもくに何目か置かせていたのが相先になり、逆に何目か置くやうになつていた。白痴は強情であつたが臆病おくびょうであつた。この別邸の裏は新潟の刑務所だが、碁を打つてお前が負けたら刑務所へ入れるとか、土蔵へ入れると云いつて脅おどかす。白痴の方では何年か前には何目か置かせて打つていた自信が今も離れない

から、せせら笑って（まったくせせら笑うのである。呆あきれるばかり一徹いつてつで強情であった）やりだすのだが、白痴の方は案に相違、いつも負けてしまう。はてな、と云って、石が死にかけてから真剣しんけんに考えはじめ、どうして自分が負けるのか原因が分らなくて深刻にあわてはじめ、それが白痴の一徹だから微塵も虚構や余裕よゆうがなくて勝つ方の愉たのしきは察せられるものがある。けれども従兄はそれだけで満足ができないので、本当に土蔵へ入れて一晩鍵かぎをかけておいたり、裏門から刑務所の畑の中に突つきだして門を閉じたりしたものだ。白痴は一晩ヒイヒイ



泣いて詫<sup>わ</sup>びている。そのくせ懲<sup>こ</sup>りずに、翌日になると必ずせせら笑ってやりだすので、負けて悄然<sup>しょうぜん</sup>今日だけは土蔵へ入れずに許してくれ、へいつくばって平あやまりにあやまるあとでせせら笑って、本当は負けるはずがないのだと呟<sup>つぶや</sup>いて、首を傾<sup>かたむ</sup>けて考えこんでいる。

毎晩負けて土蔵へ入れられる辛<sup>つ</sup>らさに、とうとう家出をした。街のゴミタメを漁<sup>あさ</sup>って野宿して乞食<sup>こじき</sup>のように生きており、どうしても擱<sup>つか</sup>まらなくなり、一年ぐらい彷徨<sup>ほうこう</sup>しているうちに、警察の手で精神病院へ送られた。そのときはもう長い放浪<sup>ほうろう</sup>で身体が衰<sup>すい</sup>弱<sup>じやく</sup>しており、冬の暮方<sup>くれがた</sup>、

病院で息をひきとった。

それはまだ暮方で、別邸では一家が炉端ろばたで食事を終えたところであつたが、突然とつぜん突風の音が起つて先ず入口の戸が吹き倒れ、突風は土間を吹きぬけて炉端の戸を倒し、台所から奥へ通じる戸を倒し、いつも白痴がこもつていた三畳じょうの戸を倒して、とまった。すべては瞬間しゆんかんの出来事で、けたたましい音だけが残っていた。それは全くある人間の全身の体力が全力をこめて突き倒し蹴倒けたおして行ったものであり、ただその姿が風であつて見えないだけの話であつた。そこへ病院から電話で、今白痴が息をひ

きとつたという報せがあつたのである。

私は白痴のゴミタメを漁って逃げ隠かくれている姿を見かけたことがあつた。白痴の切なさは私自身の切なさだつた。私も、もしゴミタメをあさり、野に伏ふし縁えんの下にもぐりこんで生きていられる自信があるなら、家を出たい、青空の下へ脱出だっしゅつしたいと思わぬ日はなかつた。私はそのころ中学生で、毎日学校を休んで、晴れた日は海の松林に、雨の日はパン屋の二階にひそんでいたが、私の胸は悲しみにはりさけないのが不思議であり、罪と怖れと暗さだけで、すべての四囲がぬりこめられているのであ

った。青空の下へ！ 自分一人の天地へ！ 私は白痴の切なさを私自身の姿だと思っていた。私はこの白痴とは親しかった。私は雨の日は別邸へ白痴を訪ねて四目置いて碁を教えてもらうことが度々たびたびあったのである。

ゴミタメを漁り野宿して犬のように逃げ隠れてどうしても家へ帰らなかつた白痴が、死の瞬間に霊れいとなり荒々あらあらしく家へ戻もどってきた。それは雷神らいじんのごとくに荒々しい帰宅であつたが、しかし彼は決して復讐ふくしゅうはしていない。従兄の鼻をねじあげ、横ツ腹を走るついでに蹴とばすだけの気まぐれの復讐すらもしていない。彼はただ荒々し

く戸を蹴倒して這<sup>はい</sup>入<sup>い</sup>ってきて、炉端の人人をすりぬけて三畳のわが部屋へ飛びこんだだけだ。そしてそこで彼の魂魄<sup>こんぱく</sup>は永遠の無へ帰したのである。

この事実は私の胸に焼きついた。私が私の母に対する気持もまたそうであった。私は学校を休み松林にねて悲しみに胸がはりさけ死ねときがあり、私の魂は荒々しく戸を蹴倒して我家へ帰る時があっても、私もまた、母の鼻すら振<sup>ね</sup>じあげはしないであろう。私はいつも空の奥、海のかなたに見えない母をよんでいた。ふるさとの母をよんでいた。

そして私は今もなおよびつづけている。そして私は今もなお、家を怖れる。いつの日、いずこの戸を蹴倒して私は死なねばならないかと考える。一つの石が考えるのである。

(昭和二十一年十一月)







日本文学電子図書館

---

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行

---



日本文学電子図書館